

国立国語研究所学術情報リポジトリ

Honorific Forms of Compound Verbs in Late Middle Japanese

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-01-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 呉, 寧真, WU, Ningchen メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00003511

中世語複合動詞の主体敬語の敬語形

呉 寧真

大葉大学／国立国語研究所 共同研究員

要旨

本稿は、中世語における複合動詞の主体敬語形の実態を明らかにした。中古語には前項と後項が敬語独立動詞になる「両項敬語形」がみられるが、中世語にはそのような形がみられない。中世語には、「敬語独立動詞＋動詞＋る・らる」のような、複合動詞の前項が敬語独立動詞になり、更に後項に敬意を表す助動詞を用いる「両項敬語形」があるが、中古語にはその形がみられない。従って、中古語と中世語では複合動詞の敬語形の用い方に差があると考えられる。そこで、中世語を中世前期と中世後期に分け、中世語にもみられる、中古語と同じ形の「一項敬語形」が中古語と同じ使い方であるかどうかについて確認した。その結果、中世語の複合動詞が敬語形になる場合、異なる形で敬意差を表し分けていることが分かった。中世前期では、2種類の敬語独立動詞を有する動詞は、より敬意が高い敬語独立動詞を用いる形と、一般的な敬語独立動詞を用いる形で敬意差を表す。1種類の敬語独立動詞しか有さない動詞は、「敬語独立動詞＋後項」に更に尊敬の助動詞を後接させる形と、「敬語独立動詞＋後項」や「前項＋後項＋る・らる」の形で敬意差を表す。中世後期では、2種類の敬語独立動詞を用いる複合動詞がみられない。1種類の敬語独立動詞しか有さない動詞は、「敬語独立動詞＋後項＋る・らる」や「前項＋後項＋せらる・させらる」と、「前項＋後項＋る・らる」の形で敬意差を表す。ただし、中世語の複合動詞の例数は多いが、複合動詞の敬語形の例数は少ない。複合動詞を敬語形にすることが減少したものと考えられる*。

キーワード：複合動詞、敬語、敬意差、中世語、変遷

1. はじめに

中世語には、以下のような例がみられる。なお、例文を引用する際、一つ目の〈 〉は出典の作品名、巻名、小学館『新編日本古典文学全集』の頁数、二つ目の〈 〉は『日本語歴史コーパス』(国立国語研究所 2019 以下 CHJ) のサンプル ID、開始位置を示す。CHJ で検索する際、位置検索で位置情報(サンプル ID、開始位置)をペーストすると、当該例を再検索できる。

- (1) 医師篤成、故法皇の御前にさぶらひて、供御の参りけるに、「今参り侍る供御の色々を、文字も功能も尋ね下されて、そらに申し侍らば、本草に御覧じあはせられ侍れかし。ひとつも申しあやまり侍らじ」と申しける時しも、

〈徒然草、第一三六段 187〉〈30- 徒然 1336_01136,670〉

- (2) ……、青葉に交じる遅桜初花よりも珍しゅう、水の面に散り敷いて、寄せ来る波も白妙な

*本研究は国立国語研究所の共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」(プロジェクトリーダー：小木曾智信)の研究成果を報告したものである。NINJAL サロン(2019年12月3日、国立国語研究所)での口頭発表「中世語の複合動詞の敬語形」の内容を加筆修正した。発表の際にご指導・ご助言をくださった方々に厚く御礼申し上げる。また、本研究はJSPS 科研費 JP19K23064(研究課題名:「古代語複合動詞の敬語の研究」)の助成を受けたものである。

れば、法皇これを叡覧有つて、かう思し召し続けられた。

〈天草版平家物語、巻第四・第二十七 396〉〈40- 天平 1592_04028,5800〉

(1) (2) は複合動詞¹ 前項が敬語独立動詞になり、更に後項に敬意を表す助動詞を用いる「両項敬語形」である。中古語には (1) (2) の形がみられず²、(3) のように、前項と後項が敬語独立動詞になる「両項敬語形」がみられる (呉 2018) が、中世語には (3) のような形がほぼみられない³。

(3) 宮の思しのたまはむこと、いかになりはてたまふべき御ありさまにか。

〈源氏物語、若紫 255〉〈20- 源氏 1010_00005,203430〉

従つて、中古語と中世語では複合動詞の敬語形の用い方に差があると考えられる。

また、敬語を一回だけ用いる「一項敬語形」について、中古語の複合動詞は、敬意差を表すために、次のような形をとる。

1, 敬語独立動詞を二つ以上有する動詞は、敬意のより高い敬語独立動詞と、敬意のより低い敬語独立動詞で敬意差を表す。

例：「来」→「おはす」<「おはします」

2, 敬語独立動詞を一つ有する動詞は、敬語独立動詞と「たまふ」で敬意差を表す。

例：「呼ぶ」→「呼びたまふ」<「召す」

3, 敬語独立動詞を有さない動詞は、「たまふ」「(さ)せたまふ」で敬意差を表す。

例：「泣く」→「泣きたまふ」<「泣かせたまふ」

従つて、複合動詞の敬語形は、主に一項敬語形になる。そして、敬語独立動詞を主に用いる動詞と、「たまふ」を主に用いる動詞に分かれ、敬語独立動詞が2種類以上ある動詞は敬語独立動詞を使う傾向があり、そうでない動詞は「たまふ」を使う傾向がある。

中世語も、中古語と同じ形の「一項敬語形」がみられるが、中古語と同じ使い方であるかどうかについては確認する必要がある。

本稿では、中世語の複合動詞の敬語形を調査し、以下の3点について論じる。

- ①中世語の複合動詞の主体敬語の形には、どのようなものが存在するのか。
- ②複数の形が存在する場合、それぞれの形の用法と差異は何か。

¹ 古代語の複合動詞の存否を論じる先行研究は多いが、本稿はひとまず形の上で「動詞連用形+動詞」になるものを複合動詞と呼ぶ。「動詞連用形+動詞」の後項に、より補助動詞的なものと、より独立動詞的なものがあると指摘されているが (大木 2018)、本稿は形の差異に注目し、「たまふ」「たてまつる」のように、完全に機能語になる語以外、形の差異がない場合、一括して扱う。

² 中古和文にも「敬語独立動詞+動詞+る・らる」の形はあるが、自発、受身、可能を表す例がほとんどであり、尊敬を表すとしか考えられない例はみられない。また、「る・らる」が後接する形の例自体も中世ほど多くない。

³ 中世語には、「召し仰す」の例だけ2例あり、その意味は「上位者が下位者を呼び寄せて、行事の役職など特定の任務につくことを命じる (『日本国語大辞典』第二版)」であり、通常語形は「呼び言ふ」ではなく、「呼び命ずる」であるはずだが、通常語形の例がない。敬語で待遇されない身分の人は命令しにくいためであると考えられる。「命ずる」は、本来本稿の調査対象に当たらないが、「仰す」は調査対象であるため、また、「召し仰す」が唯一のV型であるため、ひとまず例として扱う。

③中古語の複合動詞の敬語形と比較し、何が異なるのか。

2. 調査方法

本稿は中世語の複合動詞を調査対象にする。中古語には、以下の6種類の形がみられる。

I 型	敬語独立動詞+後項	II 型	前項+たまふ+後項	}	一項敬語形
III 型	前項+敬語独立動詞	IV 型	前項+後項+たまふ		
V 型	敬語独立動詞+敬語独立動詞	VI 型	敬語独立動詞+後項+たまふ	→	両項敬語形

まず、中世語にも同じ形があるかどうか、どのような例があるのかを確認する⁴。次に、1節で述べた通り、中世語には「る・らる」を用いる例がみられるため、敬意を表す「る・らる」が存在したり後接したりする例があるかどうかを確認し、例がある場合、I型～VI型とどのように異なるかを明らかにする⁵。

調査にはCHJを利用した。調査範囲は『日本語歴史コーパス 鎌倉時代編I 説話・随筆』（今昔物語集（本朝部）、宇治拾遺物語、十訓抄、方丈記、徒然草）、『日本語歴史コーパス 鎌倉時代編II 日記・紀行』（海道記、建礼門院右京大夫集、東関紀行、十六夜日記、とはずがたり）、『日本語歴史コーパス 室町時代編I 狂言』（虎明本狂言集）、『日本語歴史コーパス 室町時代編II キリシタン資料』（天草版平家物語、天草版伊曾保物語）である⁶。

調査対象は、敬語独立動詞を有する「来、行く、あり、ゐる、言ふ、思ふ、呼ぶ、見る、聞く、知る、寝」を含む複合動詞と、その敬語独立動詞「おはす、おはします、います、まします、のたまふ、のたまはす、仰す、おほす、おほしめす、召す、御覧ず、きこしめす、しろしめす、御殿籠る」を含む複合動詞である。

鎌倉時代編の例文は『新編日本古典文学全集』から引用した。虎明本狂言集は大塚光信編(2006)『大蔵虎明能狂言集翻刻注解』（清文堂出版）から引用した。キリシタン資料については、大英図書館蔵の資料が底本であるが、ローマ字原文ではなく、CHJの漢字仮名交じり本文を引用した。

3節では中世前期（調査資料は「CHJ 鎌倉時代編」を用いる）の使用状況、4節では中世後期（調

⁴ 中世では、中古の6種類以外にも「一おりやる」「一おちやる」「一ござる」「一たぶ」の形が考えられるが、複合動詞が前接する例が見当たらなかった。また、「御一あり」「お一ある」の形も考えられるが、以下の1例しかないため、用法の差異を比較することが難しい。

小松殿の子達は兄弟その人数六七百ばかりで淀の辺りで御幸に追い付かれた。宗盛この人々を御見付け有ってから、ちっと力付いて、世にも嬉しさうにして、
 〈天草版平家物語、巻第三・第八〉〈40- 天平 1592_03008,12010〉

⁵ 「る・らる」は自発、受身、可能、尊敬の意味があり、「す・さす」は使役、尊敬の意味がある。本節では前後の文脈を確認し、以下の手順で判断する。①前後の文脈で同じ動作主体に対して敬語を用いない場合、尊敬の意味とは考えない。②前後の文脈で同じ動作主体に対して敬語を用いる場合、意味を確認し、尊敬以外の意味として考えられる場合、尊敬の意味とは考えない。③自発、受身、可能、使役として考えられない場合のみ、尊敬の意味と考える。

⁶ 検索条件は紙幅の関係で本文末に掲げる。

査資料は「CHJ 室町時代編」を用いる)の使用状況を確認し、5 節では中古との差異を考察する。

3. 中世前期の使用状況

3.1 中古にもみられる六つの型の場合

調査資料では複数の形がみられる。最も多いのは I 型「敬語独立動詞+後項」の形 (179 例) で、II 型「前項+たまふ+後項」の例はみられない。まとめると表 1 のようになる。

表 1 I 型～VI 型の例数

タイプ	例数
I 型 敬語独立動詞+後項	179
II 型 前項+たまふ+後項	0
III 型 前項+敬語独立動詞	47
IV 型 前項+後項+たまふ	52
V 型 敬語独立動詞+敬語独立動詞	2
VI 型 敬語独立動詞+後項+たまふ	4

3.1.1 I 型 敬語独立動詞+後項

まず、前項が敬語独立動詞になる I 型は 179 例ある。これについてみると、「おはす (7), おはします (4), います (1), のたまふ (2), 仰す (18), おぼす (11), おぼしめす (27), 召す (93), 御覧す (13), きこしめす (3)」が前項になる例がある。「のたまはす, しろしめす, 御殿籠る」の単独の使用例はあるが、I 型の例はみられなかった。

- (4) 道すがらも、(後深草院ハ) 今しも盗み出でなどして行かむ人のやうに契りたまふも、をかしたも言ひぬべきを、つらさを添へて行く道は、涙のほかは言問ふ方もなくて、(御所ニ) おはしまし着きぬ。〈とはずがたり, 卷一 207〉〈30- とは 1306_01003,4050〉
- (5) 唐国に衛の靈公といふ人、晋の国へ行く道に、濮水といふところに宿りたりけるに、……。師涓といふ人を召して、この声を琴の音にうつし給ふ。そののち、晋の平公のもとにおはしつきて、〈十訓抄, 第十・六十三 459〉〈30- 十訓 1252_10063,1180〉
- (6) (性空上人ハ), かしこへ行き向ひて、長者が家におはしつきたれば, ただいま京より上日の輩下りて、遊宴乱舞のほどなり。〈十訓抄, 第三・十五 139〉〈30- 十訓 1252_03015,1480〉

(4) (5) (6) は「行き着く」の敬語形である。地の文における「おはしましー」「おはしー」の動作主体はともに身分が高い人物であるが、「おはしましー」の動作主体は院、摂政、太政大臣などであるのと比べて、「おはしー」は、(6) のように、やや低いランクの動作主体にも用いる。そのため、「おはしましー」は「おはしー」より敬意が高いと考えられる。「おぼしめす, おぼす」も動作主体の身分による使い分けが確認できる。ただし、「のたまふ, 仰す」については、「のたまひー」が 1 例しかないため、「仰せー」との敬意差は明確ではない。

また、「召す」だけは、動作主体の身分の幅が広い。

- (7) 帝、(女ヲ)御舟に召し乗せて、玉淵は詩歌にたくみなりしものなり。その女ならば、この歌をよむべし。 〈十訓抄、第十・五十 440〉〈30- 十訓 1252_10050,2480〉
- (8) 今昔、備中ノ国、……ニ藤原ノ文時ト云フ者有ケリ。字ヲバ大藤大夫云ヒケル。……。文時此レヲ聞テ大キニ恐レテ、男一人ヲ呼テ、……。……、使共奇異ク思ヒ乍ラ、即チ此ノ不調ノ男ヲ將返テ、主ノ家ニ至テ、小僧ノ走テ追来止ツル事ヲ語ルニ、文時怪ムデ、不調ノ男ヲ召出テ問フニ、……。文時此レヲ聞テ、地藏菩薩ノ眼前ノ利益ヲ貴ビケリ。 〈今昔物語集、卷第十七・第四 302～305〉〈30- 今昔 1100_17004,9580〉

(7) の動作主体は帝であり、身分が高いことが分かる。しかし、(8) の動作主体の文時について、前後の文脈では敬語で待遇されず、通常語形の「呼ぶ」を用いる場面もある。「召す」と「仰す」は関係規定性がある語と指摘されている(穂田 1976)。動作客体の「不調ノ男」は、文時の従者であるため、目上のものが目下のものを呼ぶことに重点のある表現であると言えよう。

3.1.2 III 型 前項+敬語独立動詞

次に、後項が敬語独立動詞になる III 型の形についてみる。「おはす (7)、おはします (9)、います (1)、まします (11)、のたまふ (1)、仰す (6)、おぼす (3)、おぼしめす (6)、召す (1)、御覧ず (1)、きこしめす (1)」が後項になる例がある。

- (9) これも今は昔、後朱雀院例ならぬ御事、大事におはしましける時、後生の事恐れ思し召しけり。それに御夢に、御堂入道殿参りて申したまひて曰く、 〈宇治拾遺物語、卷第四・十一 165〉〈30- 宇治 1220_04011,380〉
- (10) 春宮これを御覧じて、さらでだに恐れ思しける事なれば、「さればこそ」とて、急ぎ下種の狩衣、袴を着給うて藁沓をはきて、宮の人にも知られず、ただ一人山を越えて、……、五六日にぞ辿る辿るおはし着きにける。 〈宇治拾遺物語、卷第十五・一 459〉〈30- 宇治 1220_15001,4550〉
- (11) 其ノ御時ニ、大極殿ニシテ御齊会ヲ被始行タル也ケリ。……其ノ最勝王経ヲ講ズル講師ニハ、山階寺ノ維摩会ノ去年ノ講師勤タル人ヲ用ル。聴衆法用僧(ニハ)、皆諸寺ノ止事無キ学生ヲ撰ビ召ス。結願ノ日ハ、天皇其ノ講師及ビ聴衆ヲ宮ノ内ニ請ジ入レテ、布施ヲたまひ供養ジ給フ。 〈今昔物語集、卷第十二・第四 164〉〈30- 今昔 1100_12004,2110〉

(9) の動作主体は後朱雀院であり、(10) の動作主体は春宮である。ともに身分が高いが、院・帝は最高敬語に待遇される身分であるため、春宮よりはやや身分が高い。III 型は I 型と同じく、「一おぼしめす」のようなより敬意が高い敬語独立動詞と、「一おぼす」のような一般的な敬語独立動詞を用いる例には、動作主体の身分による使い分けが確認できる。

また、I 型の「召し」は動作主体の身分の幅が広いが、III 型の「一召す」は 1 例しかない。ただ、直前の「用ル」が非敬語形であるため、I 型と同様に目上のものが目下のものを呼ぶことに重点のある表現であると考えられる。

3.1.3 IV 型 前項＋後項＋たまふ

次に、後項に「たまふ」が後接する IV 型の形についてみる。2 種類の敬語独立動詞を有する「来、行く、思ふ」などの例も、1 種類の敬語独立動詞しか有さない「見る、呼ぶ、知る」などの例もあり、異なり語数が多い。

- (12) ……、(後深草院ハ)ねんごろに御尋ねあるもむつかしくて、ありのままに申すほどに、絵のうつくしきより始め、上の空なる恋路に迷ひ初めさせたまひて、三年がほど、とかくその道芝いしいしと、御心の暇なく言ひわたりたまへるを、いかにしたまひけるにや、
〈とはずがたり、巻二 303〉〈30- とは 1306_02005,3150〉
- (13) 恵心僧都、金峯山に正しき巫女ありと聞きたまひて、ただ一人行き向ひたまひて、「心中の所願、占へ」とありければ、〈十訓抄、第六・三十七 274〉〈30- 十訓 1252_06037,310〉
- (14) 四つの鉄山ありて、あひ去ること、おのおの四五丈ばかり、その中、一つの茅屋あり。帝、これにおはします。上人を御覧じて、悦びて、近く招き寄せたまひて、
〈十訓抄、第五・十七 204〉〈30- 十訓 1252_05017,2300〉
- (15) さる程に、童は法華経を一部読み終へにけり。その時比丘のたまはく、……。さて童に、「戒師のもとに行きたらむに、『いづ方より来たる人ぞ』と問はば、『清涼山の海雲比丘のもとより』と申すべきなり」と教へたまひて、泣く泣く見送りたまひぬ。
〈宇治拾遺物語、巻第十四・一 430〉〈30- 宇治 1220_14001,10450〉

IV 型の動作主体の身分は幅広く、(12) (14) のような院・帝から、(13) (15) のような僧都・比丘などにまで用いる。敬意差については、「おはします」のようなより敬意が高い敬語独立動詞と比べると低いと考えられるが、「おはす」のような一般的な敬語独立動詞と比べた場合に、敬意差があるかどうかは確認できない。

また、中古語では「たまふ」が後接しない語にも後接する例がみられる。

- (16) 後の嵯峨天皇第二の皇子と申すべきにや、後の深草御門には御年とやらむほどやらむ御まさりにて、まづ出で来たまひにしかば、十善の主にもなりたまはば、これも位をも継ぎたまふべき御身なりしかども、
〈とはずがたり、巻四 438〉〈30- とは 1306_04003,15280〉

(16) は「生まれる」の意味の「出で来」である。中古語では「出でおはします/おはす/ものしたまふ」と表現される。

3.1.4 V 型 敬語独立動詞＋敬語独立動詞

次に、V 型「敬語独立動詞＋敬語独立動詞」は、「召し仰す」2 例があり、異なる資料にあるが、同じ説話の同じ場面である。

- (17) [郎等→利仁]「……(狐ハ)『……』トテ、怖ヲ騒セ給ツレバ、(有仁ハ)『事ニモ候ヌ事也』トテ、男共ニ召仰候ツレバ、立所ニ例様ニ成セ給テ、其後、鳥ト共ニ参リツル也」ト。
 〈今昔物語集、卷第二十六・第十七 553〉〈30- 今昔 1100_26017,18770〉
- (18) [郎等→利仁]「……(狐ハ)『……』と、怖ち騒がせ給ひつれば、(有仁ハ)をのこどもに召し仰せ候ひつれば、例ざまにならせ給ひにき。その後鳥とともに参り候ひつるなり」といへば、
 〈宇治拾遺物語、卷第一・十八 59〉〈30- 宇治 1220_01018,18830〉

(17) (18) は利仁將軍の妻が狐に乗り移られ、利仁の命令を伝える場面である。狐は、郎等たちを迎えにこさせようと伝言し、利仁の妻の父親の有仁が狐の指令に応じて、郎等たちに出迎えるように命じた。会話文であるため、敬意差があるかどうかは確認できない。

ただし、この時代の「仰す」は、通常語とも考えられる点で問題が残り(穂田 1976, 森 1992)、また、「召す」「仰す」はともに上位者と下位者の関係を示す関係規定性を持つ語であることに注意が必要である(穂田 1976)。関係規定性の主体敬語の例はみられない。

3.1.5 VI 型 敬語独立動詞+後項+たまふ

最後に、前項が敬語独立動詞になり、後項に「たまふ」が後接する VI 型についてみる。4 例中 3 例は「召す」の例、1 例は「仰す」の例であり、他の動詞の例はみられなかった。

- (19) 三条大後の宮、尼にならせ給はむとて、戒師のために召しに遣はされければ、「……」とて参りけり。……かくて宮に参りたる由申しければ、悦びて召し入れたまひて、
 〈宇治拾遺物語、卷第十二・七 371〉〈30- 宇治 1220_12007,2240〉
- (20) 二男富小路右大臣顕忠卿のみぞ、深く天神に恐れ畏りて、毎夜、庭に出でて、天神を拝し奉りて、ことにおいて、儉約を用ひたまひけり。大臣にて六年おはしけれども、前駆をも召し具し給はず、かたのごとく後車ばかりぞありける。
 〈十訓抄、第六・二十三 250〉〈30- 十訓 1252_06023,7490〉
- (21) (右大臣顕房ハ盛重ヲ)いとほしみて、使ひ給ふに、ねびまさるままに、心ばせ、思ひはかりぞ深く、わりなき者なりける。つねに前に召し仕ひ給ふに、
 〈十訓抄、第一・四十一 85〉〈30- 十訓 1252_01041,4620〉
- (22) 天皇此ヲ聞キ給テ、讀メテ出家ヲ許シテ令度給フ。其ノ時ニ、行者本意ノ如ク出家シテ、比丘ト成 。時ノ人、皆此レヲ見聞テ、行者ヲ 其ノ金就菩薩ヲ天皇深 帰事ヲ仰セ合セ給ヒケリ。
 〈今昔物語集、卷第十七・第四十九 420〉〈30- 今昔 1100_17049,5370〉

動作主体について、(19) は皇太后であり、(22) は底本の破損により不明なところが多いが、天皇であると考えられ、敬意が高い。しかし、(20) (21) の動作主体は右大臣であり、「召しつかひたまふ」の敬意は、I 型の「召しつかふ」より高いとは言えない。また、V 型と同じく、VI 型も「召す」と「仰す」の例に限られる。

3.1.6 I型～VI型について中世前期のまとめ

全体的には、まず、例数について、I型が最も多く、179例みられるが、半分以上が「召す」の例であり、中古語より異なり語数が少ない。III型IV型も中古語より例数が少なく、特に「たまふ」を用いるIV型は、中古語では一般的な形であり、例数も多いが、中世語では、中古語で後接できない語にも後接するようになったにもかかわらず、例数が明らかに少なくなった。「たまふ」の代わりに尊敬の助動詞を用いるようになった可能性が考えられる。

次に、敬意差に注目すると、より敬意が高い敬語独立動詞を用いる複合動詞と、一般的な敬語独立動詞を用いる複合動詞との間には、敬意差がみられる。中世語では、敬意の対象により敬語の使い分けがあり、敬意の極めて高い敬語（より敬意が高い敬語独立動詞、せ・させたまふ）は、地の文では使用対象の下限が高いことが指摘されている（桜井1971、西田1974、藁谷1989など）。西田（1974）は、平家物語の地の文における敬語の使用対象を①第一グループ（天皇、院、女院、后などの皇族、摂政、関白）、②第二グループ（上達部、大臣、大納言など、三位以上の貴族）、③第三グループ（基本敬語表現を用いられない人物）、に分けている。複合動詞の場合も同じく、下限を以下のようにまとめられる。

- ①第一グループ：より敬意が高い敬語独立動詞を用いるI型とIII型。
- ②第二グループ：一般的な敬語独立動詞を用いるI型とIII型。
「たまふ」を用いるIV型。
敬語独立動詞と「たまふ」を用いるVI型。
- ③第三グループ：敬語を用いない。ただし、関係規定性を持つ「召しー」を用いることがある。

3.2 尊敬の助動詞後接の場合

調査資料に、敬意を表す「る・らる」「す・さす」が介在したり後接したりする例があるかどうかを確認するため、複合動詞に助動詞だけが介在したり後接したりする例と、I型～VI型に助動詞が後接する例を検索した⁷。その結果をまとめると表2のようになる。

表2 助動詞後接例

タイプ	例数
前項+後項+る・らる	10
前項+る・らる+後項	0
I'型 敬語独立動詞+後項+る・らる	18
II'型 前項+たまふ+後項+る・らる	0
III'型 前項+敬語独立動詞+る・らる	0
IV'型 前項+後項+す・さす+たまふ	6
V'型 敬語独立動詞+敬語独立動詞+る・らる	0
VI'型 敬語独立動詞+後項+す・さす+たまふ	5

⁷すべての形で「る・らる」「す・さす」「す・さす+らる」を別々に検索したが、「る・らる」に「たまふ」が後接する例はなかった。「す・さす」に「たまふ」は必ず後接した。「す・さす+らる」の例はみられなかった。また、「る・らる」が複合動詞に介在する形には、「仰せらる+後項」だけがみられるが、「仰せらる」は「仰す+らる」ではなく、一語として考えるため、介在例として扱わない。

3.2.1 前項+後項+る・らる

まず、「前項+後項+る・らる」は10例だけみられる。

- (23) 内の御方の女房、宮の御方の女房、車あまたにて、近習の上達部、殿上人具して、花見あはれしに、(私ハ) 悩むことありて交じらざりしを、花の枝に、紅の薄様に書いて、小侍従とぞ。
〈建礼門院右京大夫集 43〉〈30- 建礼 1232_00003,2350〉
- (24) 或人、任大臣の節会の内弁を勤められけるに、内記の持ちたる宣命を取らずして、堂上せられにけり。きはまりなき失礼なれども、立ち帰り取るべきにもあらず、思ひわづらはれけるに、六位外記康綱、衣かづきの女房を語らひて、かの宣命を持たせて、忍びやかに奉らせけり。
〈徒然草、第一〇一段 159〉〈30- 徒然 1336_01101,770〉

(23) の動作主体は女房と公卿たちであり、前後の文脈に敬語がなかったが、自発、受身、可能とは考えられず、新全集も尊敬で訳しているため、尊敬と考えた。それでも、他の敬語と共起しないことから、それほど敬意が高くないと考えられる。(24) の動作主体はある公卿であり、敬語との共起はみられるが、身分が非常に高いというわけではない。このように、「前項+後項+る・らる」のすべての例で、第二グループ以下の身分の人が動作主体になる。ただし、「前項+後項+たまふ」との敬意差は明確ではない。院・帝が動作主体になる例がみられないことから、「前項+後項+たまふ」よりやや低い可能性がある。

また、中古語にも「前項+後項+る・らる」の形はみられるが、自発・受身・可能と解釈でき、尊敬でとらなければいけない例がほとんどない。

3.2.2 I' 型 敬語独立動詞+後項+る・らる

次に、I' 型「敬語独立動詞+後項+る・らる」は、I 型「敬語独立動詞+後項」に更に助動詞が後接する形である。

- (25) 医師篤成、故法皇の御前にさぶらひて、供御の参りけるに、[篤成→法皇]「今参り侍る供御の色々を、文字も功能も尋ね下されて、そらに申し侍らば、本草に御覧じあはせられ侍れかし。ひとつも申しあやまり侍らじ」と申しける時しも、
〈徒然草、第一三六段 187〉〈30- 徒然 1336_01136,700〉
- (26) 御子の春宮、やがて位につきたまひぬ。僧伽多を召して、事の次第を召し問はるるに、僧伽多申すやう、「……」と申すに、
〈宇治拾遺物語、巻第六・九 222〉〈30- 宇治 1220_06009,25250〉

この形はI型に更に助動詞が後接する形であり、一見I型より敬意が高いと思われるが、I型はすでに第一グループに用いる形であり、I型とI'型の敬意差は明確ではない。

また、中古語も「敬語独立動詞+後項+る・らる」の形はみられるが、自発・受身・可能と解釈でき、尊敬でとらなければいけない例がほとんどない。

3.2.3 IV' 型 前項+後項+す・さす+たまふ

次に、IV' 型「前項+後項+す・さす+たまふ」は、IV 型「前項+後項+たまふ」に助動詞が介在する形である。

- (27) 大二条殿、大将にておはしける時、内へ参らせたまひたりけるを、ある女房招き、消息申されけり。近利参りて「女房、申せと候ふ」といふ声を聞かせたまひて、見かへらせたまひたりけるに、いそぎ参らせ給ふに、「無心なり」と思ひて、「忘れて候ふ」と申しける。

〈十訓抄、第一・四十二 86〉〈30- 十訓 1252_01042,740〉

- (28) 同じ院（＝一条院）、雪いとおもしろく降りたりける冬の朝、端近く居出でさせたまひて、雪御覧じけるに、「香炉峰のありさま、いかならむ」と仰せられければ、清少納言、御前に候ひけるが、申すことはなくて、御簾をおしはりたりける。

〈十訓抄、第一・二十一 56〉〈30- 十訓 1252_01021,280〉

(27) の動作主体の藤原教通は関白であり、(28) の動作主体は院である。また、前後の文脈も敬意の高い敬語を用いるため、「前項+後項+たまふ」より敬意が高いと分かる。ただし、(27) の「見かへらせたまふ」と I 型の形である「御覧じかへる」、(28) の「居出でさせたまふ」と I 型の形である「おはしまし出づ」の敬意はほぼ同等くらいと考えられる。

また、(29) のように、中古においても同じ形がみられる。

- (29) 源氏の君、宰相になりたまひぬ。帝おりるさせたまはむ（＝譲位する）の御心づかひ近うなりて、この若宮を坊にと思ひきこえさせたまふに、御後見したまふべき人おはせず、

〈源氏物語、紅葉賀 1-347〉〈20- 源氏 1010_00007,126640〉

源氏物語における、敬語独立動詞を有するにもかかわらず「一せたまふ」の形を用いる例は、わずか 10 例である。地の文 6 例における動作主体について、帝が 3 例、院が 1 例、藤壺が 1 例、匂宮が 1 例ある。匂宮以外はすべて最高敬語に待遇される身分であり、敬意が高いと分かる。

3.2.4 VI' 型 敬語独立動詞+後項+す・さす+たまふ

最後に、VI' 型「敬語独立動詞+後項+す・さす+たまふ」は、VI 型「敬語独立動詞+後項+たまふ」に更に助動詞が介在する形である。

- (30) 今は昔、一条摂政とは東三条殿の兄におはします。御かたちより始め、心用ひなどめでたく、才、有様、まことしくおはしまし、また色めかしく、女をも多く御覧じ興ぜさせたまひけるが、少し軽々に覚えさせたまひければ、御名を隠させたまひて、大蔵の丞豊蔭と名のりて、上ならぬ女のがりは御文も遣はしける。

〈宇治拾遺物語、巻第三・十九 142〉〈30- 宇治 1220_03019,760〉

- (31) (男ハ)「何文ナラム」ト思テ取テ披テ見レバ、仮名交リニ此ク書タリ、「(私ノ娘ノ) 怪キ様ヲ見エ奉テ後、(アナタハ) 思シ食シ疎マズシテ、蔵ノ物ヲモ召シ仕ハセタマヒ、近江

ノ所ヲモ憚ズ領ゼサセ給フ。喜ビ申スモ愚ニ候フ。死候ナバ御護トゾ罷リ可成キ。己レハ
近江ノ国ニ然々ト申シ候ヒシ者ニ候フ。……」

〈今昔物語集，卷第二十九・第四 302〉〈30- 今昔 1100_29004,19830〉

VI 型は 5 例中 3 例が会話文や手紙の例であり，地の文 2 例の動作主体は天皇と摂政であるため，動作主体の身分が高いと分かる。会話文の例については，話し手の身分が高くないことが共通する。また，動作主体が聞き手の場合，(31) のように，地の文では敬語使用対象ではないにもかかわらず，前後の文脈を含めて敬意の高い敬語を用いることがある。

また，(32) のように，中古においても同じ形がみられる。

(32) 上 (= 冷泉帝) は，夢のやうにいみじきことを聞かせたまひて，いろいろに思し乱れさせ
たまふ。
〈源氏物語，薄雲 2-453〉〈20- 源氏 1010_00019,92970〉

源氏物語における VI 型は，22 例みられる (のたまはず (2)，おぼす (14)，おぼおす (1)，おぼしめす (1)，大殿籠る (1)，召す (3)) が，地の文はわずか 5 例しかなく，やはり会話文に用いられる傾向がある。地の文における例の動作主体について，帝が 1 例，院が 3 例，源氏が 1 例ある。源氏が動作主体になる例は若菜上の巻にあるため，すでに身分が高く，最高敬語で待遇されているので，5 例すべて最高敬語に待遇される身分であり，敬意が高いと分かる。

3.2.5 尊敬の助動詞後接の場合のまとめ

I 型～VI 型の例数が少ないため，助動詞がその代用になる例があるかどうかを調査したが，助動詞の使用例があまりにも少なく，代用にはならないと考えられる。

地の文の場合，「前項+後項+助動詞」の敬意がやや低いが，特に新しい敬意差のグループができるわけではない。会話文の場合，地の文では I 型 III 型 IV 型の使用対象にさえならない動作主体に対して，過剰な敬意を表すことがみられる。

4. 中世後期の使用状況

4.1 I 型～VI 型の場合

調査資料では複数の形がみられる。最も多いのは I 型「敬語独立動詞+後項」の形 (42 例) である。また，III 型 IV 型の例数が大幅に減少し，中古語から中世前期にあった V 型 VI 型の例がみられない。中世前期にない II 型「前項+たまふ+後項」の例もみられない。まとめると表 3 のようになる。

表3 I型～VI型の例数

タイプ		例数
I型	敬語独立動詞＋後項	42
II型	前項＋たまふ＋後項	0
III型	前項＋敬語独立動詞	1
IV型	前項＋後項＋たまふ	1
V型	敬語独立動詞＋敬語独立動詞	0
VI型	敬語独立動詞＋後項＋たまふ	0

4.1.1 I型 敬語独立動詞＋後項

まず、前項が敬語独立動詞になるI型の形については42例あるが、「召す」が前項になる例が35例であり、それ以外では、「おぼしめす」5例、「御覧ず」1例、「仰す」1例が前項になる例がみられる。

- (33) 遠山に掛かる白雲は散りにし花の形見と成り、青葉に見ゆる梢には春の名残りも惜しまれ、
(法皇ハ) 始めたる御幸なれば、御覧じ慣れたる方も無し：

〈天草版平家物語、巻第四・第二十七 395〉〈40- 天平 1592_04028,3280〉

- (34) 季貞参って「宰相殿は早思し召し切つたと見えて御座れば、ともかうも良き様に御計らい
為されいと、」申したれば：

〈天草版平家物語、巻第一・第五 40〉〈40- 天平 1592_01005,21190〉

- (35) 「……その上仰せ合わせらるる成親卿を召し置かれた上は、仮令君如何なる不義を思し召し
立たせらるるとも、何の恐れが御座らうぞ？……、君の御為には愈奉公の忠勤を尽くし、
民の為には益々撫育の哀憐を致されば、天命に適わせられ、天の御加護有らば、君も思し
召し直す事など御座るまじいか？……」

〈天草版平家物語、巻第一・第六 46-47〉〈40- 天平 1592_01006,21900〉

「召す」「仰す」以外、地の文は(33)の1例のみである。動作主体は法皇であるため、「御覧じ一」は敬意が高いことが分かる。ただし、I型は中古と中世前期と異なり、より敬意が高い敬語独立動詞と、一般的な敬語独立動詞との使い分けのある例がなくなるため、敬意差を確認することができない。

4.1.2 III型 前項＋敬語独立動詞

次に、後項が敬語独立動詞になるIII型の形については、「まします」1例が後項になる例がみられる。

- (36) ……、夫あまてる大御神と申は、いざなぎいざなみの尊、あまのいわくらのこけむしろに
て、男女のかたらひなしたまひ、一女三男をまふけ給ふ、一女は天照太神宮、山田が原に
神とどまりましノて、あかきをば人とさづけ、くろきはぎうばと定め、

〈虎明本狂言集、ねぎやまぶし 1597〉〈40- 虎明 1642_03021,18520〉

(36)の動作主体は神であり、敬意が高いと分かる。虎明本狂言集に通常語形の例がないが、(37)のように、通常語形は「留まりゐる」であると考えられる。

- (37) 然レバ、僧共皆返ヌ。而ルニ、其ノ中ニ一人ノ持経者有リ。事ノ縁有ルニ依テ、死人ノ後ヲ訪ハムガ為ニ留リ居テ、死人ニ向テ法花経ヲ誦スル間、
 〈今昔物語集、巻第十五・第四十六 132〉〈30- 今昔 1100_15046,2450〉

4.1.3 IV 型 前項+後項+たまふ

最後に、後項に「たまふ」が後接する IV 型の形については、「並み居る」の 1 例のみがみられる。また、調査範囲を広げ、敬語独立動詞を有さない動詞が複合し、「たまふ」が後接する例を調べても 13 例しかない。中世後期の複合動詞の例数は 8,000 例を超えるにもかかわらず、IV 型はわずか 14 例であることから、IV 型の使用率がかなり低くなったことが分かる⁸。

- (38) 「抑うちみといふ事は、くわんわ元年かのとの西、其比はくわさんの院の御代なりしに、……、なみりたまへる、しやうほくめん（上北面）げほくめん（下北面）なごん（納言）さいしやう（宰相）けんびいし（檢非違使）、くろばかまのとたうまでも、みかたなづつうちつけまいらせしかば、ただまさが、只今のはうちやう神妙なり、くんこうはこうによるべしときよかん有しより此かた、……」
 〈虎明本狂言集、すずきほうちょう 411〉〈40- 虎明 1642_07029,17000〉

(38) は過去の時代の場面であり、過去の助動詞「き」を用いるなど、文語的な表現とともに「たまふ」を用いている。中世後期の口語の表現からは離れた表現であると考えられる。

4.2 尊敬の助動詞後接の場合

調査資料に、敬意を表す「る・らる」「す・さす」が介在したり後接したりする例があるかどうかを確認するため、複合動詞に助動詞だけが介在したり後接したりする例と、I 型～VI 型に助動詞が後接する例を検索した。その結果をまとめると表 4 になる。

⁸ 日本語歴史コーパスの室町時代編は、複合動詞を一つの語として認定するため、「動詞+動詞」では検索できない。そのため、本節の検索の仕方では漏れがある可能性もある。ただし、室町時代編で「動詞」を検索した結果 68,851 件あり、それに対して「動詞+たまふ」は 220 件しかないため、全体的に「たまふ」が使用されないことが分かる。ロドリゲス『日本大文典』はすでに、「たまふ」は書き言葉、「る・らる」は話し言葉であると指摘している。複合動詞も「たまふ」の使用率を反映していると考えられる。

また、「動詞+動詞+たまふ」で検索した結果、「与へたびたまふ」と「碎き祈りたまふ」の 2 例がある。「与える」と「たぶ」は同じ意味であり、同語反復に近い。「碎き祈る」は無関係の二つの動作であり、連続して動作を実行しただけである。従って、この 2 語は動詞の並列であると考えるが、本章の結論とは関係ないため、ひとまず例数に入れる。

表4 助動詞後接例

	タイプ	例数
	前項+後項+る・らる/す・さす+らる	55
	前項+る・らる/す・さす+らる+後項	0
I'型	敬語独立動詞+後項+る・らる/す・さす+らる	185
II'型	前項+たまふ+後項+る・らる/す・さす+らる	0
III'型	前項+敬語独立動詞+る・らる/す・さす+らる	0
IV'型	前項+後項+す・さす+たまふ	1
V'型	敬語独立動詞+敬語独立動詞+る・らる/す・さす+らる	0
VI'型	敬語独立動詞+後項+す・さす+たまふ	0

4.2.1 前項+後項+る・らる/す・さす+らる

まず、「前項+後項+助動詞(る・らる/す・さす+らる)」は、単独で尊敬を表す「る・らる」の例と、「す・さす+らる」の例で55例あり、助動詞の使用率は中世前期より増えた。

- (39) 北の方聞^こし召^しも敢^えず、思い入^らせ^られた気色で、伏し沈んで嘆かれ、一定打たれられさせられたとは聞きながら、若しや生きても御返り有り、

〈天草版平家物語、巻第四・第十-1, 280〉〈40- 天平 1592_04010,7220〉

- (40) 若君を乗せ奉って、六条を東へ遣る：川原に車を遣り止め、敷き皮敷いて若君を下ろし奉れば、二人の女房達日頃より思い設^けられた事なれども、差し当たっては悲しゅうて、人の聞くをも憚らず、声も惜しまず、喚き叫ばれた。

〈天草版平家物語、巻第四・第二十 358〉〈40- 天平 1592_04021,16840〉

(39)の動作主体は通盛の北の方であり、前文脈で「きこしめす」を用いている。(40)の動作主体は若君の女房たちであり、後文脈で「る」を用いている。「す・さす+らる」は、最高敬語であると指摘されている(堀畑 2007)ように、「一す・さす+らる」の例は「一る・らる」の例より敬意が高いと考えられる。

4.2.2 I'型 敬語独立動詞+後項+る・らる/す・さす+らる

次に、I'型「敬語独立動詞+後項+助動詞(る・らる/す・さす+らる)」についてみる。これは、I型「敬語独立動詞+後項」に更に助動詞が後接する形であり、「前項+後項+助動詞」と同じく、「る・らる」の例と、「す・さす+らる」の例がある。前項になる動詞は、「仰す」90例、「召す」74例が89%を占め、その他は「おほしめす」が18例、「御覧す」が2例、「きこしめす」が1例あり、I型と同じく、一般的な敬語独立動詞を使用しない。

- (41) ……、寄せ来る波も白妙なれば、法皇これを観覧有って、かう思し召し続^けられた。

〈天草版平家物語、巻第四・第二十七 396〉〈40- 天平 1592_04028,5760〉

- (42) 女院これは然るべい、私の御勸めでも有らうず：山里は物の寂しき事こそ有るなれども、世の憂きよりは住み良からうずる物をと泣く泣く思し召し立^たせられた。

〈天草版平家物語、巻第四・第二十三 372〉〈40- 天平 1592_04024,16080〉

(41) の動作主体は法皇であり、(42) は女院である。地の文中の動作主体を確認すると、「おぼしめし—せらる」は法皇 3 例と女院 1 例、「おぼしめし—る・らる」は法皇 2 例である。また、「御覧じ—る」「御覧じ—させらる」は動作主体が法皇の例が 1 例ずつある。「(さ) せらる」は最高敬語であり、敬意は「る・らる」より高いと考えられるが、動作主からは両者の敬意差が確認できない。ただし、すべての例で動作主が法皇または女院であることから、I 型の敬意は極めて高いことが分かる。

4.2.3 IV' 型 前項+後項+す・さす+たまふ

最後に、IV' 型「前項+後項+さす+たまふ」は、IV 型「前項+後項+たまふ」に助動詞が介在する形である。

(43) 「夫弓の始りと云は、天竺の大王の太子に、とんやう太子と申て、王子出来させ給ふ、此君おぼしめすは、我国の主じとなり候上は、国をしづめ民をはごくみ、国土を守らんとの御ちかひ有、……」 〈虎明本狂言集、ゆみのかたり 487〉〈40- 虎明 1642_08039,360〉

(43) の動作主体は異国の王子であり、IV 型と同じく、文語的な表現とともに「たまふ」を用いている。中世後期の口語の表現からは離れた表現であると考えられる。

4.2.4 中世後期のまとめ

まず、形の上では、中世前期と異なり、中世後期の助動詞の例は I 型～VI 型の例数を上回り、助動詞を用いる形が一般的な形になったと言えよう。また、敬語独立動詞の例数が多いが、中世前期と同じく、主に「召す」「仰す」を用い、異なり語数は中世前期より大幅に減少した。特徴的なことは、「おぼす」のような一般的な敬語独立動詞を使わないことである。

次に、敬意差についてみると、中世前期の枠を超える敬意差のグループは特にみられなかった。中世前期にない「せらる」の例が現れ、この形で最高敬語を表すようになり、複数の敬語独立動詞で敬意差を表し分けなくなった。

最後に、中世後期の複合動詞の敬語形は、異なり語数も延べ語数もかなり少ない。単独の動詞の敬語形の数は顕著に減少することが認められず、他の複合動詞の敬語の形が考えられない以上、複合動詞を敬語形にすることが少なくなったとしか考えられない。

5. 中古から中世へ

中古語の複合動詞は、敬意差を表すために、異なる形を用いる。中世語も敬意差を表すために、異なる形を用いるが、中古語と同じ使い方ではない。

中世前期は、敬語独立動詞の例も、「たまふ」が後接する例も減少した。助動詞を用いる例はあるが、それほど多くはない。つまり、複合動詞の敬語形の例が全体的に少なくなったと言える。

使用される形についてみると、敬語独立動詞を用いる複合動詞に、助動詞を加える形（I型）が現れる。I型とI型との敬意差は明確ではないが、「御覧じーる・らる」のように、1種類の敬語独立動詞しか有さない動詞を前項とする例が目立つ。その理由は何であろうか。「おはします」「おはす」のような、敬意差がある敬語独立動詞は、そのまま敬意差を示せるが、「御覧じー」は「見—たまふ」と敬意差を示さなければいけない。しかし、「—たまふ」の減少とともに、「見—たまふ」も使いにくくなった。「見—たまふ」を使用できないと、「御覧じー」の1段階しか残っていないが、敬意差を示さなければいけない。そのため、「御覧じー」に尊敬の助動詞を加えて更に高い敬意の形を作り、「御覧じー」と「見—たまふ」の使い分けが、「御覧じーる・らる」と「御覧じー」に変わったと考えられる。「御覧じー」を一般的な敬語独立動詞として使い、高い敬意を表したい場合、更に尊敬の助動詞「る・らる」を後接させればよく、こうして、I型が増えていくのである。

敬意差についてみると、より敬意が高い敬語独立動詞を用いる複合動詞と、一般的な敬語独立動詞を用いる複合動詞との間には、敬意差がみられることで、中古語からの繋がりが窺える。しかし、一部の敬語独立動詞が使われなくなることで、大量に例数がある「召す」「仰す」は関係規定性があることから、中古語の枠組みから離れたことが確認できる。

中世後期は、全体的な例数について、中世前期よりも更に減少した。

使用される形についてみると、I型～VI型では、I型以外の形はほぼ消滅し、I型も異なり語数が少ない。その代わりに、「前項+後項+助動詞」とI型は増えている。

敬意差についてみると、より敬意が高い敬語独立動詞と、一般的な敬語独立動詞の使い分けがなくなっており、低い敬意は主に「前項+後項+助動詞」が示していると考えられる。

以上をまとめると表5のようになる⁹。

⁹ I型の敬意について、I型は低い敬意のみを示すのではなく、高い敬意に加え、低い敬意も示すようになったと考える。I型は敬語独立動詞を用いるため、上限が高く、動作主体が天皇などである例もある。ただし、下限が中古より低くなっていると言える。特に会話文では、一つの敬語独立動詞に加えて、過剰に尊敬の助動詞を用いていると考えられる。なお、中世後期では、I型は地の文の例は1例しかないため、表には載せなかった。

表5 敬意差を表す形

		敬意高い	敬意低い
中古	2種類の敬語独立動詞を有する	より敬意が高い敬語独立動詞を用いる I 型と III 型 (例:「思し召し—」「一思し召す」)	一般的な敬語独立動詞を用いる I 型と III 型 (例:「思し—」「一思す」)
	1種類の敬語独立動詞しか有さない	敬語独立動詞を用いる I 型と III 型 (例:「聞き召し—」「一聞き召す」)	「たまふ」を用いる IV 型 (例:「聞き—たまふ」「一聞きたまふ」)
中世前期	2種類の敬語独立動詞を有する	より敬意が高い敬語独立動詞を用いる I 型と III 型 (例:「思し召し—」「一思し召す」)	一般的な敬語独立動詞を用いる I 型と III 型 (例:「思し—」「一思す」)
	1種類の敬語独立動詞しか有さない	I 型「敬語独立動詞+後項+る・らる」 (例:「御覧じ—らる」)	敬語独立動詞を用いる I 型と III 型 「前項+後項+る・らる」 (例:「御覧じ—」「見—る」)
中世後期	1種類の敬語独立動詞しか有さない	I 型「敬語独立動詞+後項+る・らる / す・さす+らる」 「前項+後項+せらる・させらる」 (例:「思し召し—らる」「思ひ—せらる」)	「前項+後項+る・らる」 (例:「思ひ—る」)

6. おわりに

本稿では、中世語における複合動詞が主体敬語になる場合、どのような形になるかを調査した結果、以下の結論を得た。

1. 中世語の複合動詞が敬語形になる場合、敬意差を表すために、異なる形をとる。
2. 中世前期では、2種類の敬語独立動詞を有する動詞は、より敬意が高い敬語独立動詞を用いる I または III 型と、一般的な敬語独立動詞を用いる I または III 型で敬意差を表す。前者は後者より高い敬意を示す。1種類の敬語独立動詞しか有さない動詞は、I 型に更に尊敬の助動詞「る・らる」を後接させる I 型と、I 型 III 型や「前項+後項+る・らる」の形で敬意差を表す。前者は後者より高い敬意を示す。
3. 中世後期では、2種類の敬語独立動詞を用いる複合動詞がみられない。1種類の敬語独立動詞しか有さない動詞は、I 型「敬語独立動詞+後項+る・らる / す・さす+らる」または「前項+後項+せらる・させらる」と、「前項+後項+る・らる」の形で敬意差を表す。前者は後者より高い敬意を示す。
4. 中世語の複合動詞の例数は多いが、複合動詞の敬語形の例数は少ない。複合動詞を敬語形にしなくなったと考えられる。

中世後期の敬語の使い方の傾向は、複合動詞を敬語形にしにくい点で、現代語に通じるところがある。現代にいたるまでに、どのように変遷したか、今後は近世の状況を踏まえて考察していきたい。

用例データ (本論文で利用したデータを以下で公開している)

<https://researchmap.jp/gons7808/資料公開>

参考文献

- 穂田定樹 (1976) 『中古中世敬語の研究』 大阪：清文堂出版。
- 大木一夫 (2018) 「文法形式としての古代日本語補助動詞」『訓点語と訓点資料』 140: 50-70.
- 大塚光信 (1966) 「中世敬語の特質」『国文学 特集・敬語法のすべて』 11(8): 36-44.
- 小木曾智信, 中村壮範 (2014) 「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』形態論情報アノテーション支援システムの設計・実装・運用」『自然言語処理』 21(2): 301-332.
- 春日和男 (1966) 「中古敬語の特質」『国文学 特集・敬語法のすべて』 11(8): 25-35.
- 北原保雄ほか編 (2000) 『日本国語大辞典 第二版』 東京：小学館。
- 国立国語研究所 (2019) 『日本語歴史コーパス』 <https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/> (2019年6月10日確認)
- 小島俊夫 (1998) 『日本敬語史研究 後期中世以降』 東京：笠間書院。
- 呉寧真 (2018) 「中古和文複合動詞の主体敬語の形」『日本語の研究』 14(3): 109-125.
- 桜井光昭 (1971) 「第四章 近代の敬語 I」辻村敏樹 (編) 『講座国語史 5 敬語史』 183-282. 東京：大修館。
- 西田直敏 (1974) 「平家物語の敬語」林四郎, 南不二男 (編) 『敬語講座 3 中世の敬語』 25-70. 東京：明治書院。
- 堀畑正臣 (2007) 『古記録資料の国語学的研究』 大阪：清文堂出版。
- 森昇一 (1992) 『平安時代敬語の研究 森昇一論叢集』 東京：桜楓社。
- 藁谷隆純 (1989) 『中古・中世の敬語』 徳島：教育出版センター。

付・調査での検索条件

- 鎌倉時代編における検索条件式は以下の通りである。

I 型：

キー：(語彙素読み="オウス" OR 語彙素読み="オワシマス" OR 語彙素読み="イマス" OR 語彙素読み="マシマス" OR 語彙素読み="ノタマウ" OR 語彙素読み="オオセル" OR 語彙素読み="オボス" OR 語彙素読み="オボシメス" OR 語彙素読み="キコシメス" OR 語彙素読み="オオントノゴメル" OR 語彙素読み="メス" AND 活用形 LIKE "連用形%")

AND 後方共起：品詞 LIKE "動詞%" ON 1 WORDS FROM キー

IN (subcorpusName="鎌倉-説話・随筆" AND core="true" OR subcorpusName="鎌倉-日記・紀行" AND core="true")

II 型：

キー：品詞 LIKE "動詞%"

AND 後方共起：語彙素読み="タマウ" ON 1 WORDS FROM キー

AND 後方共起：品詞 LIKE "動詞%" ON 2 WORDS FROM キー

IN (subcorpusName="鎌倉-説話・随筆" AND core="true" OR subcorpusName="鎌倉-日記・紀行" AND core="true")

III 型：

キー：(品詞 LIKE "動詞%" AND 活用形 LIKE "連用形%")

AND 後方共起：(語彙素読み="オウス" OR 語彙素読み="オワシマス" OR 語彙素読み="イマス" OR 語彙素読み="マシマス" OR 語彙素読み="ノタマウ" OR 語彙素読み="オオセル" OR 語彙素読み="オボス" OR 語彙素読み="オボシメス" OR 語彙素読み="キコシメス" OR 語彙素読み="オオントノゴメル" OR 語彙素読み="メス") ON 1 WORDS FROM キー

IN (subcorpusName="鎌倉-説話・随筆" AND core="true" OR subcorpusName="鎌倉-日記・紀行" AND core="true")

IV 型：

キー：(品詞 LIKE "動詞%" AND 活用形 LIKE "連用形%")

AND 後方共起：(品詞 LIKE "動詞%" AND 活用形 LIKE "連用形%") ON 1 WORDS FROM キー

AND 後方共起：語彙素読み="タマウ" ON 2 WORDS FROM キー

IN (subcorpusName="鎌倉-説話・随筆" AND core="true" OR subcorpusName="鎌倉-日記・紀行" AND core="true")

- 室町時代編では、複合動詞を一語として扱うため、鎌倉時代編と同じ検索条件とし、「通時コーパス」プロジェクトの共同研究員としての資格で、国立国語研究所内の「形態論情報データベース」(小木曾, 中

村 2014) を利用し、以下の SQL 文によって検索した。SQL とは、データベース言語の一つで、データベースの定義や操作を行うことができるため、より複雑な検索ができる。この検索方法は、所内の利用に限定されるが、所外でも、中納言などの他のツールを使用することで、手順は異なるが、同じ検索結果を得られる。以下検索条件内のカッコは条件式の説明である。

```
「select lemma,reading,pos from corpus
where corpusName like 'CHJ 室町 %'
  (→室町編から資料を取り出す。)
and pos like '動詞 %' and lemma like '_%[ あ - ん ]%'
  (→品詞が動詞で、三文字以上で、中に平仮名が介在するものが検索の対象。)
group by lemma,reading,pos」
```

また、前項の語幹が一音節になるものは以下のように検索する。

```
「select lemma,reading,pos from corpus
where corpusName like 'CHJ 室町 %'
  (→室町編から資料を取り出す。)
and pos like '動詞 %' and lemma like '見 %_'
  (→品詞が動詞で、三文字以上のものが検索の対象。)
  (一音節の動詞の語彙素、「為」「着」などを「見」のところに代入して検索。)
group by lemma,reading,pos」
```

また、助動詞の後接例の検索は、短単位検索ではなく、条件式検索を用いる。SQL の検索結果に、約 1500 種類の複合動詞がヒットした。短単位検索は一種類のものしか検索できないに対し、条件式検索は同時に複数の対象を検索できる。使い方は SQL 検索に近い。

「キー: 語彙素 = " (SQL の検索結果を代入) "

(→ここで 1500 種類の複合動詞を一気に検索する。)

```
AND 後方共起: (( 語彙素 = " れる " OR 語彙素 = " られる " OR 語彙素 = " せる " OR 語彙素 = " させる ")
AND 品詞 LIKE " 助動詞 %") ON 1 WORDS FROM キー
IN (subcorpusName=" 室町 - 狂言 " AND core="true" OR subcorpusName=" 室町 - キリシタン " AND
core="true")
```

Honorific Forms of Compound Verbs in Late Middle Japanese

WU Ningchen

Da-Yeh University / Project Collaborator, NINJAL

Abstract

The purpose of this paper is to clarify the subject honorific form of compound verbs in Late Middle Japanese. For the present study, Late Middle Japanese was divided into two periods, first period and second period. Results show that when a compound verb in Late Middle Japanese becomes an honorific form, a different form is used to express differences in level (degree) of respect. The following was found for first-period Late Middle Japanese: Verbs having two types of honorific-independent verbs use one form when the honorific-independent verb expresses high-level respect and another form when the honorific-independent verb shows a general level of respect. These two forms, then, each express a different level of respect. Verbs having only one type of honorific-independent verb express different levels of respect in two ways. The first form is “honorific-independent verb + second component,” to which is further added an auxiliary verb of respect. The other expresses a different level of respect and takes the form of “honorific-independent verb + second component,” or “first component + second component + ru.” In second-period Late Middle Japanese, one no longer sees compound verbs that use two types of honorific-independent verbs. Here, we see the following verbs, which have only one type of honorific-independent verb and which show different levels of respect as follows: There is the “honorific-independent verb + second component + ru,” or “first component + second component + seraru,” and there is the “first component + second component + ru.” However, although there are numerous examples of compound verbs in Late Middle Japanese, there are few examples of honorific form compound verbs. This is thought to be due to the disuse of honorific forms of compound verbs.

Keywords: compound verbs, honorific forms, deference, late middle Japanese, historical transition